

琉球大学学術リポジトリ

《国語科》新たな課題を見いだし、問い合わせ続ける生徒の育成（4年次）： 国語科における一人ひとりの学びのみどりを通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2020-08-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新垣, 真, 新垣, 元子, 栗國, 哲郎, 武藤, 清吾, 萩野, 敦子, 村上, 呂里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/46651

新たな課題を見いだし、問い合わせ続ける生徒の育成（4年次）

—国語科における一人ひとりの学びのみどりを通して—

新垣真* 新垣元子* 粟國哲郎* 武藤清吾** 萩野敦子** 村上呂里**

*琉球大学教育学部附属中学校 **琉球大学教育学部

国

語

I 主題設定の理由

1 社会的な背景から

新しい学習指導要領が中学校では2021年度から全面実施される。改訂の背景について、中央教育審議会答申（2016年12月）は、現在の子どもたちが社会人となる2030年を念頭に、「子どもたち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要」⁽¹⁾と述べている。そこで、各教科では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められている。国語科でも、言葉による見方・考え方を働きながら言語活動をより充実させることで、主体的・対話的で深い学びを実現することが期待されている。

2 これまでの研究から

前年度までの研究の成果と課題を次に挙げる。

（1）成果

- ・複数の段階で振り返る活動を設定することで、生徒が自分の学びを修正する姿が見られた。
- ・診断的、形成的、総括的、自己評価それぞれの評価を単元の指導計画に取り入れて実践した。
- ・OPPシートを活用し、形成的評価を重要視することで、授業者が次の授業改善に繋げることができた。
- ・OPPシートを振り返りとパフォーマンス課題を表裏一枚にしたことで、見通しと課題と毎時間の振り返りに繋がりを持たせることができた。

（2）課題

- ・生徒に自己評価してほしい授業者の視点と学習者の視点とに差異が見られた。
- ・生徒が自分の学び具合を実感できる評価について十分とはいえない。
- ・「努力を要する生徒」の学習観について変容が見られなかった。すべての生徒が学びに参加ができる学習指導の工夫が必要である。

3 生徒の実態から

本校の生徒の実態は、自ら問い合わせ立てて学びを次に活かしていくような探究の姿勢には欠けたり振り返る活動が浅かったりするという課題がある。

沖縄県教育委員会は、目指す授業像を「他者と関わりながら課題の解決に向かい『問い合わせ』が生まれる授業」⁽²⁾と設定し、「『問い合わせ』が生まれるサポートガイド」（2018年）で授業改善の方向性を示している。本校国語科研究テーマは、本県が目指す授業像と重なるところがあり、本県が目指す授業像と関連させて研究を進め、公立中学校の先生方と連携して実践していくことは、本県の生徒の確かな学力の向上に寄与すると考える。

本県は、全国学力学習状況調査で全国平均以下が続いている、その伸び悩む背景として貧困が指摘されている。学びに向かう力を育み、どのような環境を背景に持った生徒でも、一人ひとりが安心して学習に向かえる授業モデルを提示する必要もあると考える。

II 本研究の目的

本研究の目的は、国語科における一人ひとりの学びのみどりを通して、新たな課題を見いだし、問い合わせ続ける生徒を育成することにある。

III 目指す生徒像

- 1 学びを振り返る活動を通して、多面的・多角的に考え、問い合わせを持つことができる生徒。
- 2 主体的に学習に参加し、他者との交流を通して考えを吟味し、新たな課題を見いだすことができる生徒。

IV 研究内容

1 新たな課題を見いだし、問い合わせ続ける生徒とは

「新たな課題を見いだし、問い合わせ続ける生徒」とは、学習のまとめにおいて、分かったことなどを整理するだけではなく、習得した知識や技能を活用して、新たな解決したい課題を見いだすことができる生徒である。つまり、考え続けることをやめない生徒だといえる。

実際の授業では、数多くの「問い合わせ」が生徒の中に生まれているはずである。しかし、これまで授業者は、授業の中で良い「発問」を考えることは多くても、生徒から良い「問い合わせ」を引き出すことに重きを置いていたと言った。

野矢(2017)は、「問い合わせ」を「情報の問い合わせ」「意味の問い合わせ」「論証の問い合わせ」⁽³⁾の三種類の問い合わせの形に分けている。

「情報の問い合わせ」とは、さらなる情報を引き出す質問である。この「問い合わせ」は、より詳しく知りたいという質問と関連する話題をさらに知りたい質問に分けられる。

「意味の問い合わせ」とは、相手の言ったことの意味がよくわからないとき、それを尋ねる。それは、更にもっと分かりたいために具体的な説明を求めることが含まれる。

「論証の問い合わせ」とは、納得するために「なぜ、そう考えるのか」と根拠を求める問い合わせである。

国語科では、このような「問い合わせ」を生徒から引き出し、生徒が問い合わせ続けることができる単元をデザインしたい。例えば、説明的な文章を読む学習を通して、筆者の読み手に説得力を持たせる述べ方や構成の工夫を生徒が読み取ることができたとする。そこで、「筆者は、問い合わせかけ、比較、具体例、反例を使って読み手に説得力を持たせる書き方の工夫をしていましたね。」で終わるのでは問い合わせ続ける生徒とはいえない。生徒が「読み取った筆者の論の進め方や書き方の工夫をどうすれば自分の作文に活かし、自分の主張に説得力を持たせることができるか?」と問い合わせを持ち、学びを深めていく姿が「新たな課題を見いだし、問い合わせ続ける生徒」といえる。そのためにも、単元の学び全体が言葉による見方・考え方が自然に動き、問い合わせが生まれるような学びのデザインになるように授業者が構成していくことが大切になる。

将来、子どもたちが問題に直面したときに、どうしてうまくいかないか、どうして、その活動やステップが必要なのかなどを自問し、解決し、さらに、そこから新しい課題やアイディアを生成する力を中学校では育成しなければならない。そのような能力を育成するためには、深く考える活動や経験を授業者が授業の中で意図的に仕組むことが必要であり、生徒が意欲的にやってみたいと思う「課題設定」や「発問」の工夫が重要となる。そして、生徒が課題を解決する過程の中で生徒一人ひとりの学びをみとり、評価する必要がある。

2 一人ひとりの学びをみとるとは

本校国語科では、学びのみとりである評価を、次のように捉えている。それは、学習者の学習実態の把握と成長のための評価と授業者の振り返りと次の授業改善につなげるための評価である。そして、本校国語科は、生徒一人ひとりの学びをみとるための手段として、「OPPA（1枚ポートフォリオ評価）」を実践している。

「OPPA」の開発者である堀(2013)は、「今求められているのは、授業者自身が簡単に行うことができる授業評価と改善の具体的方法である」「多忙な教育現場で、学習者の資質・能力の育成と教師の授業評価と改善などが可能な方法として開発した」⁽⁴⁾と述べている。

OPPAとは、授業者のねらいとする授業の成果を、学習者が一枚の用紙(OPPシート)の中に授業前・中・後の学習履歴として記録し、その全体を学習者自身に自己評価させる方法である。大村はまも学習成果を記録させ、単元の学習の終了時に学習成果を構造的に把握させようとした。本校国語科では、堀らのOPPシートを参考に一人ひとりの学びをみとる実践を行う(図1)。

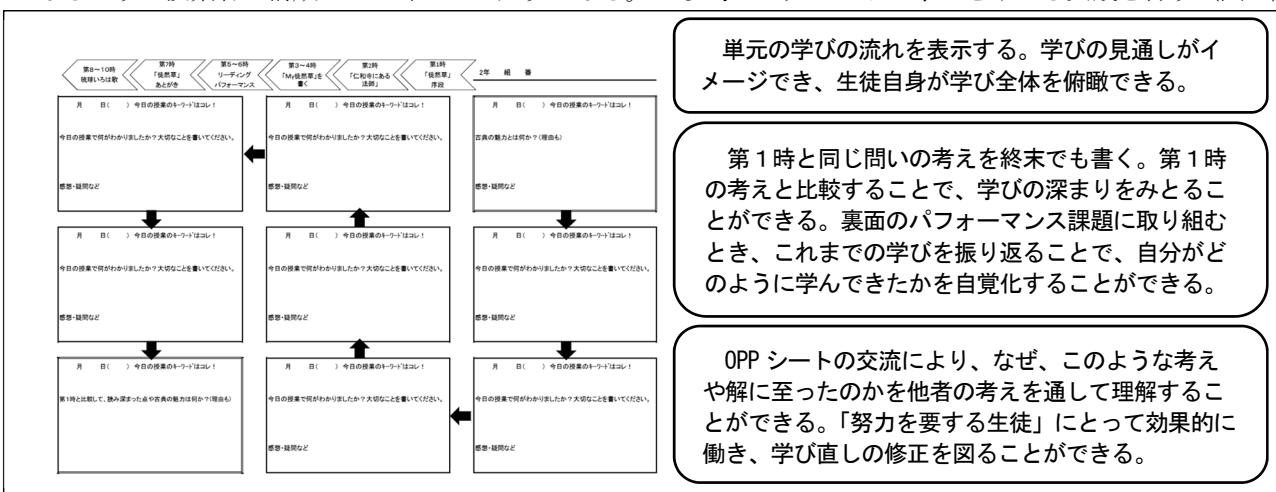


図1 OPPシートの例

3 具体的な取り組み

(1) 一人ひとりの学びをみとる単元構成

本校国語科では、単元のゴール（目指す姿）に向かって生徒自身の力で解決できる課題を設定・実施・評価し、その一連の活動を他の単元においても繰り返し行うことで言語活動の充実を図っている。そして、毎時間の振り返り以外にも、単元全体の学びを振り返る時間を複数の段階で取り入れている。単元の学びを振り返るイメージを図に表すと、次のようになる（図2）。

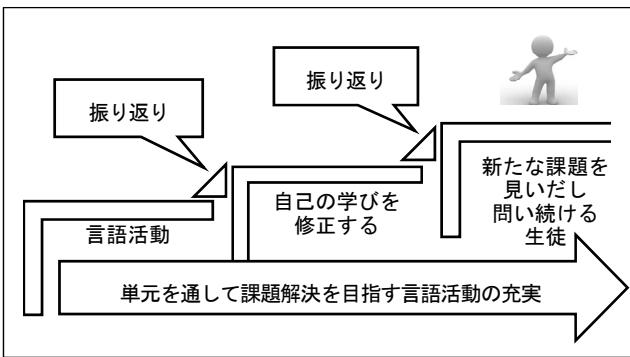


図2 複数の段階の振り返り

複数の段階で振り返る活動を取り入れることで、生徒たちは初めに設定した単元のゴール（目指す姿）に向かう学びから、どれほど到達しているか（または到達していないか）をメタ認知することができる。もし、振り返る活動のない授業デザインならば、生徒は自己の学びを自分自身で修正していく機会が与えられないまま、言語活動のみを実施するだけとなる。振り返る活動を一度だけではなく、複数の段階を設定することで、生徒は自分の学びを何度も修正しながら学び直しをすることができる。

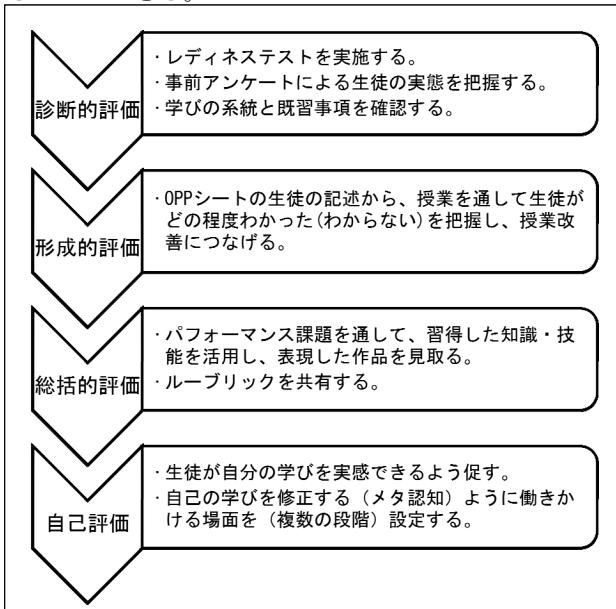


図3 指導計画における評価の位置づけ

(2) 一人ひとりの学びをみとる評価方法

評価は学習の成果だけでなく、経過も重視するべきである。本校国語科では、診断的評価、形成的評価、総括的評価、自己評価をどのように指導に組み入れることができるかを考え、それぞれの評価を単元の指導計画に取り入れて実践する（図3）。

形成的評価は、OPP（1枚ポートフォリオ評価）を活用することで、個々の生徒の学びの実態を多忙な教育現場で負担感を感じることなくみとくことができる。

以下、OPPシートを活用した工夫を提案する。

① 学習履歴を学びの視点で残すシートの工夫

本時の何について学習し、どのようなことがわかった（わからない）のか根拠を明らかにすることで、学習者の学びを評価する。そのため、OPPシートには、本時の最も重要な学びの視点を授業者がキーワードで示し、パフォーマンス課題に対してのルーブリックをシート上で共有する工夫を図る。授業後にOPPシートを毎時間提出させ、授業者は適宜コメントを残すことで生徒の学習実態を把握する。

本時で身につけてほしい授業者の視点と学習者の視点との差異を埋めるため、OPPシートに記述してほしい問い合わせあらかじめ設定する。例えば、説明的な文章を読む授業であれば、第1時に「今日の説明文で新しく分かったことと疑問に思ったこと」と設定し、単元の授業が進んだところでは、「筆者の工夫した書き方は、どのような効果があるのかを説明する」と設定することができる。

② 学習者が学びを自覚化できる自己評価の工夫

OPPシートは、単元の学習の過程全体を一枚で見渡せることができる特長がある。単元の学習全体を通して、学習者自身が単元の学習の前後を比較し、何が、どのように、なぜ変わったのかを自己評価できる。また、その思考の変容の過程を分析させることもできる。

思考の変容をOPPシートから分析させた後は、交流の時間を設定する。「努力を要する生徒」は、そもそも解にたどり着く前の思考の過程を自覚化していない場合が多い。しかし、OPPシートの交流により、なぜ、このような考え方や解に至ったのかを他者の考えを通して理解することができる。その際、理解できたことをOPPシートに記述させる。理解したことを記述することで学びの自覚化が図れる。学びの修正を図ることですべての生徒が学びに参加することができる。

V 実践事例

1 第1学年

(1) 単元名：「提案～分かりやすい説明文にするには～」

学習材：「事実と考えを区別する（補助教材）」

「スズメは本当に減っているか（本教材）」

（東京書籍『新しい国語 1』）

(2) 単元で育成したい資質・能力

①事実・意見（推測）を読み分け、図表の必要性を捉えることができる力

②図表の効果や図表と本文との関係を捉えて、書き手の意図を読み取ることができる力

(3) 本実践の目的

本単元では、「食感のオノマトペ」（三省堂）の文章を活用し、その文章のどの部分にどのようなグラフや図表が必要なのかを提案させることをパフォーマンス課題としている。「スズメが減っているか」の検証を通して、検証する際の文章の展開から事実と考えを読み分け、本文と筆者の論文を比較しながらものの見方や考え方を把握・吟味して説明的文章の読み書きの基盤を学ぶ機会とする。また、分かりやすく説明するための効果的な図表の活用や本文と図表との関係、筆者の意図を読み取ることで読み手を意識した分かりやすい説明の方法を身に付けさせることができるような単元構成にした。

生徒は、「ニュースの見方を考えよう」で情報には編集者の意図があることを学び、実際に多くの情報の中から自分でテーマを決めて、ニュースを編集し放送原稿を作成している。そのため、作られた文章には書き手の意図が存在していることは把握している。また、「オオカミを見る目」で文章構成の型や主題の位置による区分を復習し、段落どうしの関係や役割を捉えるには接続表現に着目することなどを学習している。本教材に入る前に「事実と考えを区別する」で事実と考え（意見や推測）の見分け方を学び、説明的文章を読む際の基本はおさえている。単元のゴールとしてのパフォーマンス課題を設定したことにより生徒の「図表やグラフは多くあればいいってわけではないんだ」「どうすればわかりやすくなるのか」という主体的に課題に向き合う姿勢が見られた。

本単元では、「事実と考えの区別」「書き手の意図の読み取り」を身に付けるために学んだことを生かし、文末表現や接続表現に着目し、パフォーマンス課題である文章の事実の部分にどのような図表が必要かを吟味する力を育成することができる。また、図表の効果を考えさせることで読み手を意識することの大切さを実感し、論文と教科書の図表を比較し、本文と図表の関係性を考えることで、書き手の意図を読み取ることができる力につながると考えた。

(4) 実践内容

第1時では、OPPシートで単元のゴール（パフォーマンス課題）を確認し、学習の見通しを持ち、「事実と考えを区別する」で、文章における事実と考えの区別の仕方を学んだ。

【パフォーマンス課題】

あなたは、ある教科書会社の編集員です。説明文「食感のオノマトペ」の本文のみを教科書に掲載するよう上司に言われました。しかし、このままでは、誰が読んでも「わかりにくい説明文」です。そこで、あなたが上司に「わかりやすい説明文」にするには、図表もあったほうがいいと提案しましょう。文章の構成や展開などを参考に、文章にあった図表の種類（裏を参照）とその理由、効果について余白に自分の考えを書き込んで提案内容をまとめましょう。

第2時から「スズメは本当に減っているか」を読み、段落分けを行い全体の構成を確認した。図表・本文のそれぞれから読み取れる事実を捉え、伝わりやすい文章にするには、どのような工夫が必要かを考えさせ、3つの検証の必要性について考えた。

第5時で、「筆者はなぜ、このような図表の順序にしたのかを考えよう」という課題を解決するために筆者の書いた論文を参考資料として配り、教科書と論文の検証データの順序が違う理由を個人で考えさせた。グループ交流で一つの意見にまとめ、全体交流を通して筆者の意図にせまった。そのときに、疑問や質問は聞き返しなどをして納得いく意見と理由をまとめた。自分では思いつかなかつた新たな気づきによって発見や自分の考えの補足・修正をする場面を設定した。

第8時から、パフォーマンス課題である文章「食感のオノマトペ」のどこにどの図表が対応するかを考え、図表を選択する課題に取り組み、グループ交流にて、付箋紙でコメントし推敲を行った。完成した課題を読み合い、相互評価をして最後にOPPシートで単元のふり返りをする単元構成（表1）とした。

表1 単元の指導計画（全10時間）

次	時	評価規準〔 〕は評価方法	具体的な学習活動
一	1	■事実・推測・意見を区別したり、考えの根拠に線を引いたりしている。(観察・発言)	・「事実と考えを区別する」を読んで、事実と見え・根拠・推測と意見の特徴を理解する。
二	2 3 4 5 6 7	■図表、本文の事実と考えを読み分け、それぞれから事実を書き抜くことができている。 ■3つの検証過程、なぜ三段階必要だったのかの理由を説明している。 ■文章の展開の工夫を、文章に対応した資料(図表やグラフ)の特性や根拠をもとにまとめている。 ■筆者の文章展開や資料の使い方について自分の意見をもち、文章にまとめている。	・図表から読み取れる事実、本文から読み取れる事実をそれぞれ捉える。 ・「スズメは本当に減っているか」についての検証過程を3つ(①自由学園での調査②農業被害面積と水稻田の面積③鳥類繁殖分布調査)について、それぞれの必要性を捉える。 ・筆者はなぜこの順序にしたのかを考え、グループで意見交流とまとめを行い、全体交流を行う。 ・筆者の本文の展開や資料の使い方についての工夫点について自分の意見をまとめる。
三	8 9 10	■根拠と効果を明確に、文章にあった資料や図表を選び交流している。	・説明的文章を読んで、文章のどこの部分にどの図表やグラフを使った方が読み手により伝わりやすい文章になるか工夫する。

国語

(5) 実践の考察

① 生徒の学習の評価（授業前後の変容・比較）

生徒Aと生徒B（学習苦手群）の比較で本実践の検証を行う。第1時と第10時のOPPシート（表2）で「伝わりやすい文章にするには、どのような工夫が必要ですか？」という問い合わせに対し、それぞれ次のような記述が見られた。

表2 生徒A、生徒Bの授業における変容の様子

生徒A 第1時	文章をおく順序や言葉、情景描写、具体例などの工夫をつかう
生徒A 第10時	伝わりやすい文章にするには、読む相手にあわせた言葉づかい、文章構成にし、その文一つ一つに合わせたグラフ、表を効果的につかうことで、伝わりやすくなり、相手の立場になってかくことが大切
生徒B 第1時	文の書き方を工夫する
生徒B 第10時	その文章にあったグラフや図表をいれるとよい。また、三段型構成にするとよいと分かった

生徒Aは、第1時で「オオカミを見る目」で学習した内容を踏まえてまとめている。第10時では、読む相手を意識した言葉遣いや構成、文に対応したグラフや表の活用など新たに単元において学習したことを加えて記述することができている。第6時で文章構成の在り方について吟味し、第7時で読み手を意識した文章や言葉遣いが必要であると気づいたためこのような記述になったと考えられる。

生徒Bは、第1時では具体的な工夫について記述することができずにいるが、第10時ではグラフの使い方や構成についても記述することができている。それは第6時で図表の順序を考える授業において、グループ交流で他者の考えを聞いてグループで一つの意見にまとめる活動によるものと考えられる。その際のわかったことの欄に「テーマにあった順序で図表を書くことが大切」という気づきが記述されており、感想・

疑問の欄には、「全ての人が分かりやすいようにするためにには、どのような順序が大切か？」と新たな問い合わせられている。また、第9時のパフォーマンス課題での交流では、評価基準を示し条件を満たすためのアドバイスを目的とした交流を行ったため、「みんなからもらったアドバイスを活かし、理由と効果を書き直した。」という記述も見られた。その結果、文に対応した部分に適切なグラフを選択し、そのグラフによる効果まで考えて書くことができていた。

このように、「伝わりやすい文章にするための工夫」について第1時では「構成」や「言葉遣い」、「具体例」など文章上の工夫にしか着目していなかった生徒がグラフや図表、挿絵の存在の大切さに気づき、順序にも筆者の意図があることを学んでいた。パフォーマンス課題でも、自分なりにグラフを選び、交流で説明を行うことでわかりやすい文章にするための工夫について改めて気づき、考えている姿が見られた。

② 授業デザインの振り返り

生徒は論文と教科書との図表の比較、グループ交流によって、読み手を意識することや伝わりやすい文章にするための工夫について本単元を通して学ぶことができたように見えた。グループ交流前に、自分の意見をしっかりとまとめる時間を1時間設けたのは、交流のために重要な活動であった。

③ 授業デザインの改善点

交流においてホワイトボードを使用し意見の集約を行ったことにより、意見が傾く様子があり、多角的な意見や発見を十分に引き出すことができなかった。また、グループ活動において、「もう少し詳しく教えてください。」「なぜ～と考えたのですか？」などの聞き返しによる学びの深まる指示が必要であったと感じられる。グループ活動の際の聞き返しを習慣化することが生徒の多角的な意見の交流に役立つと考えられる。

2 第2学年

(1) 単元名：6 描写を味わう

「小学生に文学の魅力を紹介しよう」

学習材：太宰治 『走れメロス』

(2) 単元で育成したい資質・能力

・「文学的文章」を自力読み（自分の観点を持って読み進める）できる力を育てる。（C（1）エ・（2）ア）

(3) 本実践の目的

本教材は、自分の身代わりとなった友との約束を守るために、幾多の困難を克服して王城にたどり着こうとする主人公メロスの姿を中心に描かれた作品である。これまで「愛」「友情」「真実」などを主題として読み進めてきたが、登場人物の葛藤や苦悩の描写を中心に読み進めていくと、また新たな読みを確立することができ、様々な視点から読みを深めることができる。変容していく人間像を、描写や場面ごとの仕掛けから読み解いていくなど、生徒一人ひとりの読みの観点をもとに多様な読みが実感できる作品であると考える。本単元では、情景や心情の描写を捉えて作品を味わう力を定着させ、描写を手掛かりにして登場人物の心情や生き方を読み取る力を身に付けさせることを目指す。

生徒はこれまで、文学的文章としては、1年時で「少年の日の思い出」の学習を通して作品の構成の工夫について考える学習を行っている。説明的文章の学習を通して、段落の役割や筆者の論の進め方について学習し、自分の考えを述べる活動を行っている。また本学級の生徒は、しっかりした態度で授業に臨み、全体での発表は控えめな生徒もいるが、与えられた課題に熱心に取り組むことができる。しかし、個人の力だけで十分に読み取ることができない生徒もいるため、他者との対話を通して読み深める学習を展開したい。

本単元は、「観点を決めて読む」という学習課題を設定し、いくつかの観点での読み方を学習した後、「走れメロスの面白さ」をまとめさせる。その後小学校で既習した文学作品を改めて読み、読み直すことで見えてきた面白さをまとめ、小学生と交流するという課題を設定している。文学的文章について、生徒が自分なりの読みの観点を活用して読解し、自らの考えの根拠を基に対話し合う活動を行えば、生徒が主体的に文章を読解する力を身に付けることができると考えた。

(4) 実践内容

第1時では、全文を読み「自分なりの観点」を持って読み進める方法について確認した。また、単元末のパフォーマンス課題を提示し学びのゴールを意識させた。

【パフォーマンス課題】

来年度入学を希望している小学生に対して、入学説明会で展示する、「あなたの知らない文学の世界～『○○』編～」という、文学作品の面白さを紹介するリーフレットを作成することになりました。そこで、「あなたの知らない文学の世界～『走れメロス』編～」と題したリーフレットを、400字以内で作成しなさい。また、それをもとに小学校4年生で学習した作品「ごんぎつね」の紹介リーフレットを作成します。その後小学生との交流を予定しています。

第2時では、場面の展開や登場人物の関係性を押さえ、今感じる「走れメロス」の魅力を400字で書いた。第7時に推敲する際、大部分の修正を行うことで、自分の学びをメタ認知する機会とした。

第3時から6時にかけて、「文学作品」を読む観点の学習を行った。第3時は「書かれ方（文体の特徴・語り手の視点・書き出しと結びの文）」に着目して読むと、読み手にどんな印象をもたらすのかを考えた。読む観点（視点）を与えることで、語り手の視点が変わっていることや、文章の長さや比喩表現、文末表現の意味に気づき、新たな読みを獲得している様子であった。

第4時から6時にかけても、「描写」「構成」「比較読み」の観点から読み、自分なりに読みを構築している姿が見られた。

第7・8時は、第2時で書いた紹介文を推敲する活動を行い、リーフレットに清書した。第3時から第6時までに学んだ観点を基に推敲するため、文章の構成から見直す生徒もいた。また、推敲する際に「消しゴムを使わない」という条件を付けたため、視覚的にも自分の学びの深まりを感じているようであった。生徒の振り返りでも、「直すところが多すぎるくらいあったので、いろんな視点に気づけたという事実に驚いた」という記述も見られた。

第9・10時では、「ごんぎつね」を読み、作品の魅力について紹介リーフレットを作成した。気になった場面や表現に線を引くなどしながら、書かれ方の工夫点や表現（描写）に意味づけを行うことで、それを自分の解釈に結び付けて紹介文を書いている様子であった。

「走れメロス」で学んだ文学的文章を読む観点を想起しながら読むことを意識させた。

(5) 実践の考察

① 生徒の学習の評価（授業前後の変容・比較）

第1時での「走れメロス」の魅力についての記述と、いくつかの読みの観点を学習し終えた第7時の記述の変容から、読みの深まりを検証する（表3）。

表3 記述から見える生徒Aと生徒Bの読みの深まり

第1時 生徒A	王様はどうせ約束を破ると思っていたのに、ギリギリメロスは時間に間に合って、王様の今までの偏見をくつがえしたところが良い。
生徒A 第7時	第1時のときは、ほとんど初見の感想で、言い換えれば上辺だけしか見れていないかった。だけど、毎授業を通して、ちょっとした短い文の中にも、いろんな情景やイメージがあって、細かい表現の使い分けが魅力につながり、それが登場人物の心情の変化につながっていて、おもしろさになっていると思う。
第1時 生徒B	「友情・真実」について書かれている。自分の心と対話しながらも、負けずに走るメロス→それを信じて待つセリヌンティウス。
第7時 生徒B	メロスが乗り越えていった困難を、メロス目線で描くことで、どれだけ苦労したかが伝わりやすくなり、情景描写のおかげで、メロスの心情の変化や、今後の未来についてわかりやすくなっている。

生徒Aは第1時の記述において、「走れメロスの魅力はどんなところだと思いますか」という問い合わせに対して、あらすじや王の変化についての漠然とした記述でまとめている。それが、第7時では、第1時の記述を読み直し、自分の読みの浅さに気づき、文体の特徴から受ける印象や、表現（描写）の工夫があるからこそ、登場人物の心情の変化が読み取れることに気づいた記述になっている。

また生徒Bは、第1時で「自分の心との対話」を通してセリヌンティウスとの友情や信じる気持ちが深まっていくと記述し、自分の心との対話がこの物語のカギになるということを読み取ってはいるが、具体的な記述には至っていない。それが第7時では、「語り手の視点」がメロスになることでメロスの苦悩がより詳しく読み取れると分析し、メロスの心情の変化や次の展開を予想させる伏線を、「情景描写」から読み深めている。

このように、どちらも第1時の記述では、作品全体のおもしろさについて述べていることは分かるが、言葉を読む面白さであったり、文章表現（描写）を別ものと関連付けて新たな読みを広げたりするという読みには至っていない。しかし、「書かれ方の工夫」「描写」「構成」「比較読み」の観点で作品を読む学習を行い、

それぞれの視点から読むと、読者に与える印象や効果はどうなるかを考え、それを班で解明していく中で作品の面白さ（魅力）について自分の読みを少しづつ広げていた。また、毎時間班で他者と考えを交流し合い、全体で共有しながら、考えを深めている様子であった。

② 授業デザインの振り返り

本単元は、「走れメロス」を通して学んだ「文学作品を読む観点」を活用して、小学4年生で既習した「ごんぎつね」を読み、新たな「ごんぎつね」の世界を再構築するという単元を設定した。また一度書いた「走れメロス」の紹介文を推敲するという作業を取り入れることで、自己の学びの深まりをメタ認知できる構成にし、その読解をさらに相手に伝えるためにどのような表現をすればよいかを考えさせた。その一連のつながりを生徒AのOPPシートの記述から確認する（表4）。

表4 生徒AのOPPシートの記録（第1・7時を除く）

第2時	「走れメロス」の良さを具体例をもとに説明して、読み手への問い合わせや接続表現など文の構成を意識した。
第3時	「メロスは激怒した」から始まることで、疑問を持ちストーリーが進み、「3日間のリミット」を読者が受け取り、気持ちが先走りする感じ。
第4時	たくさんの「色」に関する描写があって、そこには深い意味や思いがあることに気付いた。
第5時	この場面構成には意味があって、自然→他人→自分との戦いを通して物語が盛り上がり、メロスが勇者に変わったことにつながっている。
第6時	書き足された部分があることで、メロスの心情の変化が分かりやすくなり、あえて人間（メロス）の醜い部分を書くことで、メロスがより勇者になって見える。
第8時	文の構成はもちろん、「走れメロス」を読んだ人しか分からぬ、隠された良さを書いた。具体的では「読み観点」からメロスの視点や語り手の視点で考えたことを書いた。
第9時	自分は一つの視点でしか読んでいなかったけど、友達は二つ以上の視点から作品を分析していた。自分が気付かないことを友達と分析していくことで新たな考え方を見つけられる。

③ 授業デザインの改善点

今回、単元の始めに書いた「作品の魅力」の書き直しの作業を単元の末に行い、更にそれを他と交流し再修正することで、自己の学びの深まりをメタ認知することにつながったと考える。その学びを確認した上で「ごんぎつね」の面白さをまとめ、交流を通して他者からの学びを得ることができた。しかし、「ごんぎつね」では交流後の推敲作業を行えていたため、学びの深まりをメタ認知できる活動を取り入れるべきであった。

3 第3学年

(1) 単元名：「目指せ！批評の達人～新聞広告の批評文を書こう」

学習材：「黄金の扇風機」「サハラ砂漠の茶会」「観察・分析して論じよう 批評文」（東京書籍『新しい国語 3』）

(2) 単元で育成したい資質・能力

- ① 批評の対象について、観察・分析したり比較したりする判断力
- ② 論の進め方を工夫し、他者の意見や資料を参考にしたり引用したりして説得力のある批評文を書く力

(3) 本実践の目的

批評とは、関心のある物事について、よいかどうか、優れているかどうかなどを評価して論じることである。好き・嫌いで評価するのではなく、対象をしっかりと観察・分析したうえで判断を示すことが大事となる。

本単元で育成したい批評する力は、社会生活の中で、多様な人々と関わり合うことが多くなると予想されるこれから時代に必要な力の一つと言える。

本単元では、「ことば」をテーマに実施された2016年度「新聞広告クリエイティブコンテスト」から三つの広告作品を批評する学習を実践した。

本実践では、広告制作者の意図を読み取り、制作者と読者の視点を明確にした交流活動を取り入れた。また、批評文の記述・推敲の各段階で相互交流活動を行うなど、学び合いを行う単元構成（表5）にした。

表5 単元構成（全9時間）

次	時	学習活動
一	1	・「批評の達人」通信を使い、学習目標とパフォーマンス課題を確認し、学習の見通しを持つ。
	2	・「黄金の扇風機」と「サハラ砂漠の茶会」を比較して、美しさを感じることや美について筆者の考えの共通点や相違点を捉える。
	3	
二	4	・手順①～⑥に従って問題に取り組み、チョコレートのポスターA～Cを観察・分析して批評文を書く。
	5	・交流を通して、他の人のものの見方や考え方、文章の書き方などについて、気づいたことを書き留める。
	6	
三	7	・手順①～⑥に従い、新聞広告の批評文を書く。
	8	・グループになり、書いた批評文を回し読みし、評価を付箋紙にメモする。
	9	・「学習を振り返ろう」で自己評価する。

生徒は、レイアウトやデザイン、キャッチコピーなど言葉の内容を具体的に取り上げ分析し、読み取る。これら読み取ったことを生徒どうしで学び合う活動をしながら批評文を書くという学習活動を通して、理解としての「読むこと」と表現の「書くこと」の二つの力を相互に高め合うことを目的としている。

今回は、生徒らが「読むこと」との関連における「書くこと」の意義について、学びの自覚化ができるよう工夫した。具体的には、OPPシート（ここでは名称を「批評の達人」通信と呼ぶ）を活用する。パフォーマンス課題を書くことで終わらせるのではなく、「書くこと」によって身につけることができた学びの力を単元の振り返りの時間に改めて自分自身の言葉で表すことで、学習の後も生き続ける学びになるとを考えたからである。このような学びの自覚化が「新たな課題を見いだし、問い合わせ続ける生徒の育成」につながると考える。

(4) 実践内容

第1時では、単元末のパフォーマンス課題を提示し、学習に取り組む意欲を促した。

【パフォーマンス課題】

日本新聞協会広告委員会は、全国の若手クリエーターを対象に、新聞広告クリエイティブコンテストを実施します。作品は、どれも新聞広告の可能性を広げる、独創的で斬新な広告ばかりです。

「ことば」をテーマに、三つの作品が最終選考に選ばされました。A・B・Cのうち、どの広告が最も優れているでしょうか。それぞれの広告を観察・分析したうえで、六百字程度で批評文を書いてみよう。

第2時から、東京書籍の「黄金の扇風機」、「サハラ砂漠の茶会」を読み、筆者が「美」についてどう捉えているかを考えた。そして、二つの文章の論の進め方や表現について共通点や相違点を見つけ、評価する学習を行った。

第4時からは、「観察・分析して論じよう」を読み、批評文を書く手順を確認する。批評文を書く練習としてマイボトルのポスターやチョコレートのポスターを観察・分析し、観点を決めて判断を下しながら批評文を書く。書いた批評文は、グループになって批評文を回し読みし、評価を付箋紙にメモして交流する。

第7時からは、批評文を書く手順に従って新聞広告の批評文を書く。書いた批評文を前時のように交流し、最後に単元の振り返りを行う単元構成にした。

(5) 実践の考察

① 生徒の学習の評価（授業前後の変容・比較）

生徒Aは、OPPシートの第1時に「多様な読み手を説得できる批評とは？」の問いに次のように記述した。

反論などが出てくることを予測し、その人を納得させるような例や考え方を示すと良い。

これは、第2学年で学習した「反論」の既習が表れたと考えられる。そして第8時では、第1時と同じ問いに次のように記述した。

その事柄の良いところ、メリットを信頼できる根拠とともに目立つように書いたり、逆に選ばれなかつたものに、そのような良いところ、メリットが欠けていることを指摘したりする。また、自分が重視していることを始めに明記する。

単元の学習を通して、批評文を書く際の要点について自分なりに理解できたことを「良いところ、メリット」という語句を用いて記述し、対象をしっかりと観察・分析し、「反論」とは別の説得力のある文章を書く工夫について言及している。

では、生徒Aはどのように、このような考えに至ったのか。それについては、前々時のOPPシートの記述に注目することで生徒の学びを見取ることができる。

読者を引きつける表現（なぜぼくが○のポスターを選んだのかというなど）の工夫をする、根拠は複数持ってきており、資料も引用するなどを自分は修正すべきだった。「自分にはこれが精一杯…」と批評文を書きながら思つたけど、アドバイスをもらって「もっと良くできそう！」と思えました。

この時間はチョコレートポスターを観察・分析して批評文を書き、交流を通して他の人のものの見方や考え方などについて気づいたことを書き留める学習だった。生徒Aは、交流を通して自身の批評文の課題を発見し、友達の改善のアドバイスから「もっと良くできそう！」と主体的な態度で次時の新聞広告の批評文を書く活動に取り組むことができるようになっている。

② 授業デザインの振り返り

チョコレートポスターの批評文を書く時間で単元が終末を迎えていれば、生徒Aは、批評文を書くことについて学び直しの自己修正ができずに終わってしまっていた。本単元は、第一次、第二次で、批評の対象を観察・分析する判断力を獲得し、第三次で説得力のある批評文を書く力へ繋げる授業デザインとなっている。つまり、第一次、第二次の学習が成功体験として、第三次の学習へ繋がっている単元構成である。生徒に単元

のゴールを提示し、学びの見通しを持たせながら学習を進め、OPPシートを活用して自己の学びを丁寧に振り返る授業デザインである。

単元末の振り返りで、生徒Aは次のように記述した。

批評文を書くことを通じて、「自分の言いたいこと・意見」とそれを支える「根拠」を、どんな順番や使い方、または考え方でつなげていくかに気をつけて書くことで、多くの人が読んでも納得してもらえる、説得力が高まる、主張が強くなるといった効果があることに気づいた。言いたいことは伝わっても、いまいち説得力のない文章も、文章の構成や言葉の使い方によって変わるんだなと感じた。（相手への伝わり方を考える。）

生徒Aの記述からは、本単元の学習から相手意識を持ち、言葉による見方・考え方を働かせながら書くことに対して考えを深めている姿が確認できる。このような学びの自覚化ができるような授業改善に努めたい。

③ 実践を踏まえた授業の改善点

本実践では、学習活動が「個人で批評の対象を観察・分析する」→「グループで意見を交わして見方や考え方を深めたうえで批評の観点を定める」→「批評文を書く」という段階で進んだ。

『中学校学習指導要領解説国語編』の「書くこと」の「構成」に関する指導事項では、「第3学年では、文章の形態を選択して適切な構成を工夫すること」と示されており、「適切な構成を工夫すること」とは、「選んだ文章の形態にふさわしい構成を工夫すること」「自分の立場を鮮明にした上で、意見の中心となる部分をはっきりさせ、論理の展開が明快な文章構成を工夫することが大切である」と述べている。

しかし、本実践においては、「適切な構成を工夫すること」について指導が十分だったとは言い難い。批評の観点が「○○と□□と△△だ」と頭の中で決まった生徒であれば、すぐに批評文を書く活動に移ることも可能だったかもしれないが、すべての生徒がそのように書くことは難しい。

そこで、「構成を工夫する」ための手立てが必要だったのではないかと省みた。具体的には、「構成メモ」の作成や、観点についてメモを取ったワークシートに赤ペンを用いて、観点を丸で囲んだり、順序の番号を書き込んだりする時間を設定することも必要だったと考える。そのようにすれば、「最初はこの観点で書き、次はこの観点で…」と論理の展開が明快な文章構成の批評文をすべての生徒が書くことができただろう。

VI 成果と課題

1 成果

(1) 一人ひとりの学びをみとる単元構成

本校国語科では、「新たな課題を見いだし、問い合わせる生徒を育成」するために、生徒一人ひとりの学びをみとる単元構成を構想し実践した。その成果として見えてきたことがあった。以下にまとめた。

① 「期待する生徒の学び」と「深い学びへ繋ぐ手立て」

本校では、学力は1時間単位の細切れで育成されるものではなく、単元全体を通して育成されるという考え方から、単元構想の全体を見渡せる学習指導案を作成している。具体的には、学習指導案はA3サイズの見開きで両面印刷されている。表側の面は「単元名」「単元で育成したい資質・能力」「単元について」「生徒の実態」「本時のねらい」「本時のみどころ」「本時の学習活動」が表記されている。教科の特性により多少の違いはあるものの、本校が共通実践している学習指導案である。

裏面は、単元指導計画が記述されているが、本校国語科では、今年度、新たに学習指導案を作成する際に単元指導計画の中に、「評価規準」「具体的な学習活動」「指導上の留意点」に加え、「期待する生徒の学び」と「深い学びへ繋ぐ手立て」の二項目を追加した(表6)。

本単元の中で、生徒にどのような力を身につけてほしいのか、考えてほしいのか(「単元で育成したい資質・能力」)を設定し、それについて生徒は学習前にどのようなことを知っていて(「生徒の実態」)、それが学習後にはどのように深まってくれるのか、また、生徒の解の中に含まれていてほしい要素を生徒目線の表現で予想したことが「期待する生徒の学び」である。

「期待する生徒の学び」が予想できなければ、授業は独りよがりの授業で生徒はどんな力も身につかない。また、「期待する生徒の学び」を生徒の気持ちになって具体的に表現することができなければ、「生徒の実態」から「期待する生徒の学び」に至るまでの過程で、どのような授業の工夫を行えばいいのか手立てをイメージすることもできない。大切なのは、学習する生徒側の学ぶ姿に寄り添って考えながら授業を作ることである。

本校国語科では、授業作りの際に、この「期待する生徒の学び」を単元構想の中で具体的に設定した。そして、単元のゴールに向かって、「この時間までには、ここまで到達してほしい」「この時間では、○○のような問いをもっていてほしい」と生徒の学びを想定しながら単元を構想していった。そうすることで、主語が授業者中心の授業から、生徒の学びを中心に据えた授業の実現へと繋げることができた。

「深い学びへと繋ぐ手立て」は、毎時間、設定していない。すべての時間に「深い学び」があることは理想形である。しかし、単元の中で「この時間は次の授業のための布石にしておこう」「この時間は単元の最終時に取り組むパフォーマンス課題の練習の時間」など、ある程度割り切って設定した授業時間もあって然るべきだと考える。

単元の指導計画の中で「深い学びへと繋ぐ手立て」を講じることで、授業者は学習指導の方向性について思考の整理をすることができた。また、参観した先生方が同じような授業を実践する際に、「深い学びへと繋ぐ手立て」の記述があることで、どの学校の生徒でも「深い学び」へと導くことができる示唆となった。

表6 「期待する生徒の学び」と「深い学びへと繋ぐ手立て」の例

次	時	期待する生徒の学び	深い学びへ繋ぐ手立て
一	1	○エジプト人は華やかなものを好む傾向があり、日本人とは異なる美的感覚がある。でも、グローバリズムの浸透によって、エジプト人の美的感覚が失われつつあってそれは望ましくない。	
	2	○砂漠でした体験は茶会に通じる。また出された食事はどれも驚くほどおいしかった。人間は皆同じだ。	
	3	○相違点 「黄金の」の筆者は、何に美しさを感じるのは文化や地域によって様々だ。「サハラ」の筆者は、美は共通である。 ○共通点 心を柔軟になることで他の人が感じる美しさに共感できる。	◆内容面だけにとどまらず、文章の構成、まとまりどうしの関係、具体例の用い方、文末表現に着目し、相違点や共通点をまとめる。
二	4	○ロゴマークAの特徴の場合 「夢」はボールの絵の中に書かれている。四隅に桜の花びらを一枚ずつあしらっている。など	◆AとBの双方を観察して気づいた特徴について、どのような表現効果があるかを考える分析を行う。

② 「分析レポート」の交流

本校国語科では、テストの解答を生徒自身で分析し、思考過程の振り返りを重視した「分析レポート」を実践した(図4)。

「分析レポート」は、「課題」と「自由」の二種類の問題を分析することを求めた。「課題」は、授業者が定期テストで特に振り返ってほしい問題を指定して分析する。「自由」は、生徒自身が自由に定期テストの中から問題を抽出して分析する。それは、誤答でも正答でもどちらでも良いとした。「なぜ、この問題を正答(誤答)したのか」を分析することで、「誤答」であれば同じ間違いを繰り返さない役割を果たす。また、「正答」を分析すれば、「正答」を導き出した思考課程を振り返っているので、次の定期テストで同じような問題が出題されても正答を導き出すことができる。

さらに、本校国語科は「分析レポートの交流」を行う時間を取り入れた。「課題」問題の分析は、すべての生徒が共通して取り組んでいるので、分析の仕方を交流することで、自分が分析したときに見つけきれなかった別視点の分析を他の生徒から発見することができた。

ある生徒は、「分析レポートの交流」をしたあとに、次のように記述した。

分析をした後、同じような問題が出た後に、どのように解けば良いのかまで詳しくできている人がいて分かりやすいし、次にもつなげられる良い分析だと思ったので、自分も参考にしたいと思いました。なぜ正解できたのか、自分の思考を振り返っている人もいて良いと思いました。

このように、「分析レポートの交流」を通して多様な分析に触ることは、目指す生徒像である「学びを振り返る活動を通して、多面的・多角的に考える生徒」の実現につながった。

実は、「分析レポート」を交流する時間にレポートを完成させていない生徒が数名いた。その生徒らのほとんどが学習面において「学習苦手群の生徒」、生活面で「努力を要する生徒」だった。それでも、交流後には「学習苦手群の生徒」、「努力を要する生徒」は、「分析レポートの交流」を通して獲得した分析の別視点を使って、もう一度、自分の定期テストの解答用紙に向き合い、結果としてすべての生徒が「分析レポート」を完成させて提出することができた。「分析レポートの交流」は、どのような環境を背景に持った生徒でも、一人ひとりが安心して学習に向かえる授業モデルとして提案できると考える。

図4 分析レポートの例

(2) 一人ひとりの学びをみとる評価方法

本校国語科では、昨年度から生徒一人ひとりの学びをみると評価方法として、OPP(1枚ポートフォリオ)シートを実践している。

昨年度の課題として、生徒に自己評価してほしい授業者の視点と学習者の視点とに差異が見られた。そこで、今年度、OPP シートに改善を加えた。具体的には、OPP シートに前もって生徒に自己評価してほしい視点を記入することにした。例えば、説明的な文章において、本時の振り返りの場面で「ニュースを見たり、情報と接したりするときに大切だと思うこと」について振り返るよう OPP シートに予め「振り返りの視点」を印字する工夫を行った。このような新たな工夫を行うことで、実際の授業では、授業者が生徒に自己評価してほしい視点で振り返る活動を生徒は行うことができるようになった。

一方で、実践しながら新たな課題も見えてきた。それは、自分の言葉で学習した内容をまとめる力を育むには十分な成果が得られなかつたことである。「振り返りの視点」が予め印字されているために、学んだ内容を印字された言葉を使ってまとめてはいても、既習事項の語句と語句を繋いで書けば十分と判断する生徒がいた。それでは、「学びを振り返る活動を通して、多面的・多角的に考え、問い合わせを持つことができる生徒」には繋がらない。そこで、OPPシートの項目は「今日の授業の大切なこと」で統一し、「感想・疑問」の欄を「新たな問い合わせ」の項目名に変更した。

このようなOPPシートに変更して実践した第3学年古典分野の単元の実践を紹介する。本単元は、『万葉・古今・新古今』『奥の細道』『論語』を1つの単元にした。単元のゴールであるパフォーマンス課題は、「中学1年生が知らない古典の○○○な世界」として設定し、中学1年生に古典の魅力を伝えることを目的とした。

ある女子生徒は、古典分野の学習前に古典の魅力について、次のように記述した。

今でも共感することのできる教訓があつたり、恋の話もあつたりして昔から同じだと感じることができる。

学習前の記述は、中学2年の『徒然草』の学習などを引き合いにして書いたと推察される。そして、古典分野の学習後には、次のように考えが変容していた。

古典には何度も読んで、色々と考えないと分からず、もとの文以上に深い意味が込められていることもあります。また文は、作った人の気持ちの変化が表れやすく、思いを字に表せる昔の素晴らしい手段だと思います。

女子生徒のOPPシートをみると、女子生徒は古典分野の学習を通して、古典に知識からではなく感情・感性から対峙しようとしていることがわかる（図5）。

OPPシートの記述をみると、『奥の細道』の学習で「平泉」を学習した後に記述した「新たな問い」が次第で解決していることも分かる。これらから単元を通して女子生徒が、「主体的に学習に参加し、他者と交流を通して考えを吟味し、新たな課題を見いだすことができる生徒」となった姿の過程をみるとることができる。

以上から、OPP（1枚ポートフォリオ）シートは、一人ひとりの学びのみとりを通して「新たな課題を見いだし、問い合わせる生徒」を育成するのに有効な手段の一つだといえる。

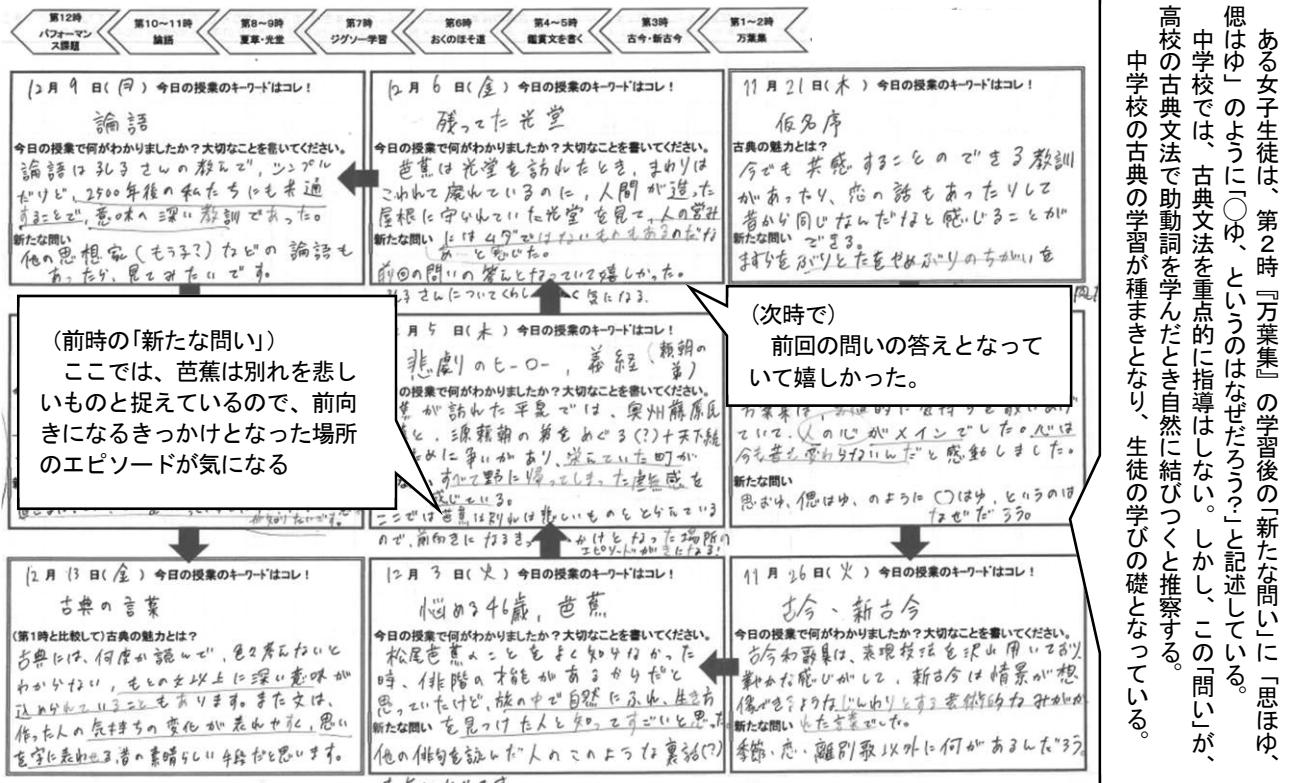


図5 女子生徒のOPPシート